

「第3期白馬村食育推進計画（案）」に関する パブリック・コメント募集の結果

【概要】

近年、食に対する考えかたや生活習慣が多様化、さまざまな情報が氾濫する中で、村民一人ひとりが食に関する正しい知識や適切な判断力を培い、すべての人が健全な食生活を実践できるよう、個々ではもちろん、村全体が一丸となって共に食育を推進していくため、「第3期白馬村食育推進計画」を策定します。この計画の案について、村民の皆様のご意見を募集しましたので、結果を公表します。

【意見募集結果】

実施期間	令和4年1月17日から2月18日まで
意見提出状況	意見数 3件

【提出されたご意見】 ※一部要約

▶ 意見（1/3件）

真に村民の身体の健康のためを思うのであれば、地産地消だけではなく、有機栽培や自然栽培などオーガニック関連の文言も入れるべき。（近年、農薬や化学肥料ほか、食品添加物等を多く摂るようになってから日本人のアレルギーなど、生活習慣病とされるものが増えてきたという専門家による報告も聞く。）

気候非常事態宣言も出し、世界でも有数のリゾート HAKUBA だからこそ環境に優しいとされる動きを積極的に、率先してやっていくべきではないか。

▶ 意見（2/3件）

有機農業の促進、有機野菜の給食導入を希望。国の進める、みどりの食料戦略にも有機農業が重要視されている。

有機野菜の供給量が増えれば、需要も高まるが、新たに慣行農法から有機農法に切り替える、又は新規で始めるにはハードルが高い。有機 JAS の申請料の負担が多く、大手担い手や慣行農法にはある補助金などが、有機農法向けには少ない。白馬村でもアドバイスを求めているオランダ在住のサーキュラーエコノミー実践の著書の安居氏も、オランダのアムステルダムでは有機関連事業促進の為に、補助金を出しているという事例がある。

また、多数の有機関連の著書である吉田太郎氏（長野県農業試験場企画経営部・有機農業推進プラットフォーム担当）は、有機農業の促進に有機給食導入の事例をあげている。

有機野菜を給食導入している市町村は多く、松川村池田町安曇野市などでは実績があり、大町市でも有機給食に向けて動いてもいると聞く。国内でも導入している市町村は多く、韓国では100%有機野菜の給食、ヨーロッパなどの国も高い割合で導入がある。

有機農業促進の為に、新規、現行有機農家にも補助金などサポート頂き、学校給食導入で、地産地消野菜としても安心安全な野菜としても、大事な成長期の子供達にも食べて頂き、有機農家の野菜搬入先として頂きたい。また、有機野菜を食べている子供は、病気に強く我慢強く心身共に健康的になるというデータがある。

コロナ禍で、自己免疫力が注目され、栄養価の高い健康的な有機野菜は見直されている。

農薬や科学肥料に頼らない健康的な有機野菜はファイトケミカルという物質が多く作られ、この物質の多い野菜を食べた人間の健康にも左右されると聞く。健康的な野菜を食べることは、近年問題になる生活習慣病の若年化対策にもなり、肥大化している医療費対策にもなる。健康な人が増え、医療費削減となり、健康寿命が伸びれば元気に活動でき生産性も上がり一石二鳥。

有機農業はゼロカーボン対策でもある二酸化炭素削減にも有効。地中に二酸化炭素を固定すべく、あえて草を生やす緑肥を多用する。畑を耕し、剥き出しの土状態では、地中の二酸化炭素が放出する。松本市波田や山形村の春先の酷い砂嵐の地域でも緑肥は見直されている。緑肥は二酸化炭素を地中に固定し酸素を供給し砂漠化も防ぎ、肥料過多や除草剤農薬による河川の流出も防げる。価格高騰している科学肥料に頼らず、地産にて有機物の循環化環境を作ることができる。

環境面でも気候非常事態宣言をしている白馬村としても、積極的に有機農法を促進頂き、二酸化炭素削減にも貢献できればと思う。その上で環境に配慮した有機野菜を地元学校給食で食べることは未来の子供達を見据えた成長、健康や食育につながる。

地産の有機野菜は観光資源にもなりえる。白馬の地産有機野菜が、健康的で二酸化炭素削減になっているとなれば、観光資源としてもかなりのアピールになる。スノーピーク白馬では都心部の方向けに、白馬産の野菜ツーリズムを村内にて開催している。さらに有機野菜として付加価値をつけ夏場の観光資源としてオーガニックツーリズムも充分可能。

▶ 意見（3/3件）

夫婦で移住し4年がたつ。隣人は92歳1人暮らし、75歳ご夫婦世帯。白馬村の1世帯2.2人、高齢者人口約50%（総人口8500人）の縮図を見るよう。近隣は移住者がほとんどで、白馬の食文化を知る機会が少なく、近所の交流もあまりない中、年月がたち自立が難しくなった時どうするのだろうと考えると不安にもなる。地元の食文化と移住者の食文化交流で人と人とのゆるやかなつながりのできる場が定期的に身近な単位であり、次に近隣地区で地元住民と移住者との食の競演などがあり、食文化の交流と人と人との関係づくりで人の顔が見える緩やかな関係づくりが出来ればうれしい。

【提出に対する白馬村の考え方】

○ 意見（1/3件）、意見（2/3件）に対する回答

貴重なご意見ありがとうございます。

まず、本計画案で掲げる3つの目標のにもございます、村の「食を知り健やかな心身を育む食育の推進」という目標の背景には、趣旨にも記載させていただいているように、現代における食に対する思考や文化等の多様性を前提とした「食への選択力」を育てる旨を含みます。農業、および農作物においての考えも例外ではありません。現在、村内の農業・農作物においても多くの方に、その農業方法を限定することなく規格基準、残留農薬基準等既定の中で、村民の安心・安全のために白馬村の農業を支えていただいています。そのため、本計画案では特定の農法や農作物に関しての明記はしていません。

次に、学校給食に関してのご意見ですが、現在、学校給食センターへの農産物搬入は、安全・安心な給食を提供するため、一定の規格・数量等の基準が定められており、限られた時間、人員での調理が必要です。国が示す学校給食摂取基準に基づき、栄養教諭等が多様な食品を組み合わせることで栄養バランスや季節感、食文化を含めた献立を作成しています。本計画案での目標値にも掲げる通り、今後も地場産物を積極的に利用したおいしい給食を提供できるよう、供給する農家、調理する学校給食センター、消費者である生徒の意思疎通が大切になります。まずは、それぞれがどのように成り立っているかを知るための取組みから始めたいと考えます。

また、国は「みどりの食料システム戦略」において、2050年までに目指す姿として、耕地面積に占める有機農業取組面積を25%（100万畝）に拡大すると方向性を示しました。実現のためには技術革新とともに農家、消費者の意識改革が必要になります。有機農産物は有機JAS認定が条件ですので、村では農家支援として認定費用の支援を考えております。

次に、健康関連のご意見ですが、有機農産物が一般的な農産物より栄養価が高いことは、十分な根拠が得られていない状況です。

最後に、ご意見にもある通り、有機農業が環境保全に効果があることは、国際的にも評価されています。食育関連項目としては目標値として、国の掲げる目標に合わせ「環境に配慮した農林水産物・食品を選ぶ人の割合」「食品ロスの削減のために何らかの行動をしている人の割合」という目標値を新たに設置しており、今後の動向を踏まえ、課題としての検討をさせていただきます。

➡計画案変更なし

○ 意見（3/3件）に対する回答

貴重なご意見ありがとうございます。

本計画案の目標値としてもございますが、みんなで作る・食べるなど、食を通じたコミュニケーションは、食の楽しさを実感できることや、食事のマナー、食文化を学ぶ場、身に着ける場としても大きなメリットがある一方、現在のようなコロナ禍では、感染リスクの面で難しい状況もあります。今年度、食の情報の共有としてCookpad 公式キッチンの開設や白馬村行政ホームページでの情報発信の運用を見直していたところではありますが、やはりご意見にあるような「顔の見える関係」以上のものはないのかと痛感するところもございます。今後も健康面からも配慮しながらではありますが、本村の郷土料理や文化が受け継がれていくよう、関係団体と連携しながら今後の活動への参考とさせていただきます。

➡計画案変更なし